

自由貿易論の先驅者

貿易に関する学説史的研究（其の一）

副島万里夫

（一） 重農主義貿易論

重農主義学派 (Physiocracy) によれば、農業のみが純収入を生ずる源泉であり、農業あるによつて経済生活は可能となるのである。商業、運輸の如きは、財貨の場所、乃至時間的移転をなすにすぎず、工業の如きも原料の結合変形を行うにすぎず、凡そこれらのことは何物をも生産するものではない。

即ち重農主義にあつては、商業は等価値の財貨の交換、乃至保存をなすにすぎず、それは何等の生産的作用を営むものではない。

交易によつて起る効用の増加を、生産の觀念中に包容することは、彼らの考え及ばぬところである。換言すれば自由貿易論の先驅者

自由貿易論の先駆者

ば、財貨を生産することが唯一の生産であり、効用の創造、又は増加を生産とみることがあり得ないのである。この点において、貿易による金銀の獲得を、国富増加の唯一の手段なりとした重商主義とは、全く対照的な見解を有するものである。

彼らにあつては、外国貿易はかくの如くに富を生産せず、たゞその結果は利得を得ることがあるというだけである。しかし、国家は自国に余る物を輸出し、欠乏する物を輸入しなければならない。従つてこの点からいえば貿易は欠くわけには行かない。

即ちケネーによれば、商業の有益なる場合は、たゞ農産物が生産者より消費者にわたる時のみであり、それなくしては物は生産者の手許で死滅するからである。しかし、売らんがための買入行為は浪費であつて、中間商人の搾取をみるにすぎなく。(Gide and Rist "A History of Economic Doctrines," p. 28)

しかも、貿易政策的見解においては、重農学派は自由貿易を主張する。そしてその論拠においては、英国古典学派が国際分業、乃至比較生産費説、トランスファ―理論を土台として、自由貿易を主張したのとは異なり、当時種々の束縛を蒙つていた国内商業の自由を欲する結果にすぎなく、又彼らが主張するところの自然の秩序から導き出されたものである。即ち国の内外を問わず自由に売買出来なければならないとする。ケネーは、「商業の完全な自由を維持せしめよ。何となれば、国民乃至国家にとり、国内商業及び外国貿易の最も確実な、最も精確な、最も有利な統制者は、競争の完全な自由である。」という。又「自由貿易は秩序及び正義の要求に合致するものであるということ、又秩序に合致するものは、何んでもそれ自体の報酬があるということを、彼らに告げなければならなく。」(Ibid., p. 29)

しかし自然の秩序ということでは自由貿易の利益は漠然としている。彼らによれば、この自然の秩序は自明のことであり、それは神が人間の幸福のために定めたものであるという。或いは内観により察知することが出来るという。即ち、この法則は外的事実の觀察の結果ではなく、内なる確信——合理的であり教養もあり、自由精神をもつ重農派の人々にとつて相ふさわしい確信——の表現である。であるからミスは重農派議論の非現実性を指摘して、「ケネーは、政治的団体はたゞ一定の厳格な養生法、即ち完全な自由と完全な正義という正確な養生法を守つて、はじめて繁榮するものと想像した様である。……しかし、かくの如くであれば、世界で榮えた国民は一つもないことになる。」と云ふ。(Coman's, Vol. II, p. 172)

そこで、彼らの自由貿易論の論拠は、特に農産物の自由輸出を欲する点にあつたということを指摘したい。これより先、コルベヤ (J. B. Colbert, 1619—1683) は、工場労働者の生活費を引下げ、又工業輸出品の増大を図るために、穀物の輸出を禁止したのであるが、これは当然に穀価の下落を来たし、農村の困窮を招来したのである。重農学派はこれに反対し、その自由輸出を認めて穀価の上騰を図ろうとした。「最高価格のみが、われらの富の蓄積を増し、農業によつて人口を維持することが出来るようにする。」(Gide and Rist, *Ibid.*, p. 29) しかし彼らは強ち最高価格を欲求するのではなく、自由輸出によつて穀価の平均を得ることが最大の眼目であつたのである。オンケンは、重農者の商業政策は当時英国でとられていた方法即ち過剰の際は価格維持のために輸出を奨励し、欠乏の時は同様の目的のために輸入を奨励していたのと同じ趣旨である旨を指摘している。(Ibid., p. 30)

かくして重農派は自由貿易を主張し、重商主義者の主張する諸学説には反対する。彼らはまづ重商主義の貿易

自由貿易論の先馳者

差額説を反駁する。リヴィエールはいう「私が諸君の貿易相手国に流通するすべての金を諸君に与えたとする。諸君はそれで何をしようというのか。相手国に金がない以上は、当方からの輸出は止むであらうが、金の増加につれて、金の価値は益々下り、物の価値は益々騰貴する。従つて又外国からの購入が起り、金の流出となり、事態は正常に復するであらう。」と。(Ibid, p. 31)

輸入税は貿易相手国がこれを支払うとの説も、換言すれば輸入税は外人に転嫁せしめることが出来るとの説も、彼らの反駁するところである。他の国にも購入者ある以上は相手は当方に対して不当に安く売るものではない。即ち、課税は外人に転嫁されるものではなく消費者がこれを負担する。

かゝる重農者の議論は、一七六三年乃至六六年の穀物輸出入の自由に関する条令において実を結んだ。が不幸にもそれから数年間悪收穫の日が続いたので、重農学者達は攻撃を受けた。彼らの抗議にも拘わらず、条令は一七七〇年に廃止され、ついで一七七四年にチュルゴーがこれを復活し、七七年にはネッカアが又これを廃止した。これは一面当時世論の変転常なきを物語るものである。

最後にその代表的学者ともいべきケネーの貿易に関する所説を覗つてみたい。ケネーにあつては、農業は国家の凡ゆる富の根源であり、農業にとり不利なものは凡て国家と国民とに有害である。而して商人階級は、時として国民の一部たるに足らずとも考える。さればコルベヤが穀物の輸出禁止を敢行し、これによつて穀価の低下をはかり、都会生活者の生活費を引下げ、輸出工業の隆盛を策するや、それは安い穀物によつて農村を犠牲にし、国の真の富の根源たる田園を荒廃せしめるものなりとして論難する。即ち、ケネーの主な関心事は農業尊重にあるのであつて、商業の如きものは本来その眼中にないものである。たゞ農業の發展に阻害ある限りにおい

て、商業の束縛即ち穀輪禁止を難ただけである。従つて、自由貿易か保護貿易かを論ずることは、必ずしも念とするところではない。

ケネーにあつては、自由貿易論は農業尊重論の結果の産物にすぎない。アダム・スミスは「諸国民の富」の中において、重農学派の学説を農業の体系と述べているけれども、これは彼らの思想体系の特質を最も正確に明言したものである、即ち、ケネーにあつては、自由貿易主義は、農業繁栄のための実際政策というにすぎず、彼の農業尊重論が直ちに農業保護論となり、よつて農業関税設定論とならなかつたことは寧ろ不思議である。

(Gide and Rist, Ibid, p. 20)

(二) 英国における自由貿易論の先駆者——スミスまで

重商主義政策は、一方においてはフランスにおける重農主義学者によつて厳正な批判を受けたのであるが、他方においては間もなく英国における自由放任思想乃至自由貿易思想の勃興によつて、一層衰退を余儀なくされた。英国における自由貿易学説は、スミス乃至リカルドによつて集大成されたものであるが、重商主義的な制限貿易に対する抗議は、嚴格に言えばアダム・スミスの「諸国民の富」にはじまつたものではない。スミス思想の先駆者ともいふべき人々が多数存在しているのである。

それらの学者の中でニコラス・バァボン (Nicholas Barbon) は、まだ完全に重商主義の影響を脱するものではないが、外国財貨の輸入は、必然的にそれに相当する国産品の輸出を惹起するものとして、貿易制限制度の理

自由貿易論の先駆者

論を反駁している。ついでダッドレー・ノッス (Dudley North, 1622—91) がいる。かれには一六九一年「商業諸論」(Discourses upon Trade) の著があるが、それによれば、富の根源は、土地の耕作乃至工業に適用される人間の勤勞であつて、金銀とは独立の存在である。しかし貴金屬は国富の一要素であつて重要な役目を持つ。貨幣は一国において干満があるけれども、これは必要に応じて自發的に起るものである。商業の渋滞が貨幣の不足から起ると考えるは誤りであつて、これは国内市場の過剰品、乃至消費力の減退から起るものである。貨幣の輸出は国富の減退ではなく、反つて増加を示すものである。けだし貿易は要するに余剰物の交換であるからである。都市が国家に、家族が都市に依存するのと同様に、諸国民は經濟上世界に依存するものである。かくして貿易は公衆のためのものである。貿易榮ゆれば国民も榮える。すべて強制、干渉は避くべきものであり、自由、勤勞、妨げられざる經濟的活動により、国民はあつたがままに富裕になるものと論じている。(Ibid, p. 35, 36)

クレメント (Simon Clement 1655—1720) は、重商主義の影響を脱して、更に自由主義を力説する。彼の著書には、一六九五年出版の「貨幣、貿易及び交換の一般觀念についての論文」(A Discourse of the General Notions of Money, Trade and Exchanges as they stand in relation to each other, attempted by way of aphorism, etc.) その他があるが、金銀をもつて、単に商品中の高級品にすぎないと為した如きは、重商主義者に異なる点であらう。

つぎにロック (John Locke, 1632—1704) は、一六八九年から一七〇六年にわたつて陸續出版された叢書「寛容についで文書」(Letters on Toleration) の中には、国家とは、人々の私益増進の機関にすぎないことを述べている。しかし、これを以てロックを完全に重商主義の影響から離脱せるものとなすことは出来ない。何とな

れば、彼は貨幣を非常に尊重し、富は金銀の多少に比例するものとなし、鉞山に恵まれぬ国においては、富を増加する方法はただ二つあるのみ、即ち征服か貿易か何れかであると述べている。

その他に自由貿易思想の先駆者として挙げられる者にペッティ、チャイルドらがある。

ペッティ (Sir William Petty, 1623—83) によれば、金銀は、価値の測定標準にすぎないものであるとし、土地と労働とこそ富の根源であるといっている。一六六二年出版の彼の著「課税及び憲法についての論文」(Treatise on Taxes and Contributions) 中に「ごまの如く述べている。『どうしてわれらはわれわれ自身の手や国で作れない外国生産品を禁止せねばならないのか。われわれがわれわれの余計な手や土地を、同じもの或いそれ以上買える様な輸出品に使用することの出来る際に』」(Ch. VI, p. 48) しかし彼は必ずしも終始一貫自由貿易はを主張したのではなく、ある場合には富の根源として、金銀の特別優る点を認めた様にみえるとの批評がある。(Palgrave, Dictionary of Political Economy. Vol. III, p. 100)

チャイルド (Sir Josiah Child, 1630—99) には「貿易乃至貨幣の利子についての短かい觀察」(Brief Observations concerning Trade and the Interest of Money, 1688) その他がある。彼は貿易差額論の信奉者であることは重商主義者と交りないが、外国から買うこともせず、たゞこれに売ることだけを考えることは不合理である旨を説き、金銀はワイン、オイル、煙草等と同様に商品であり、従つて他の商品同様に、国家の利益において輸出され得ることを述べている。

以上はスミス以前にあつて、重商主義の圏外に出て自由貿易への途に近づいた人々である。

モンゼル (James W. Angel) は、以上述べ來つたノウス、ロック、クレメント及びバァボンの四人を目し

自由貿易論の先驅者

て、彼らは当時の自由主義者であり、重商主義の旧式な制限學說に反対せるものではあるが、今日の眼を以てすれば、彼らの自由學說は明瞭に反動的である。例えば、ノウスの自由貿易は制限された範圍のものであり、ロツクもその素晴らしい理論的展開にかゝわらず、實際政策にふれる時においては、断片的重商主義に墮するものであり、ただクレメントのみが幾分この危険を脱する上に成功したものと批評している。(The Theory of International Prices, 1926, pp. 16—17)

リスト (Rist) によれば、英国においてはチャイルド、ペッテイ、タッカマ、ノウス、グレゴリー・キングは、外国貿易上自由政策への道を準備しつつあつたものである。(Guide and Rist, p. 54.) 尚ほ、英国初期の自由貿易論者についてアシェレイのつぎの論文を参照すること、The Tory Origin of Free Trade Policy, Quarterly Journal of Economics, July, 1897)

しかし、それらの学者の各々については、前述以上に詳しく論ずる必要はない。たゞ、アダム・スミス以前において、もつとも偉大な貿易理論を示したデヴィッド・ヒューム (David Hume, 1711—76) について、稍々詳細にその所論を検討してみたいと思う。

ヒュームは、「当時の最も卓越せる哲學者乃至歴史家」であつたのである。(Wealth of Nations, Cannan's, Vol. II, p. 275) しかし、ヒュームは又すぐれた經濟學者であつて、貨幣、利子、外国貿易及び貿易差額につき、ものした論文は、他の論說と共に一七五二年出版の「政治諸論」(Political Discourses) の中に載せられてゐる。本書は、翌五三年「諸問題に関する論文集」(Essays and Treatises on Several Subjects) 中に加えられ、その第一編第二部を構成している。さてヒュームは、それらの經濟的課題につき、概ね政治家的見地から觀

察しているが、これは、経済学が漸く政治哲学から離成立しようとしている当時の情勢を物語るものである。しかし、ヒュームの所論は、独創的であり明快であり、重商主義の不合理、貨幣が各社会の必要に適応せんとする自然的傾向に干渉することの愚かさ、貿易差額説の詭弁、ならびに貿易の嫉妬より生ずる悲しむべき結果につき、力強い見解を与えている。本論文がスミスに影響を与えたことは勿論であつて、スミスはグラスゴウ大学の講義中にしばしばこれを引用している。といつて、彼とスミスを同等価値の学者とはみることが出来ない。

ヒュームは、重商主義の説論に対して、国民経済上金銀の非重要性を主張する。「貨幣が多いか、少ないかなどはつまらない話で。……人と商品とは、如何なる社会にとつても眞の力である。……労働的蓄積の中に、すべての眞実の力と富が存立する。貨幣は、商業の機構を円滑容易ならしむる油にすぎない。物の交換のために必要な程度を超えて存する貨幣量は、物価を吊上げ、外国人を国内市場より駆逐する有害なる結果をもたらすものである」。

これらは、彼の「Essays moral, Political and Literary」中にみえる議論であるが、また、「Of the Balance of Trade」中においても、同様のことをみることが出来る。一国が貴金屬の貯えを失うことをおそれるのはいわれなきことである。

国民にして適當なる産業を有する限り、彼らは必要な貨幣を必ず与えられるのである。たとえば、一国貨幣の五分の四が一夜にして消失するしたら結果はどうなるか。すべての労働及び商品の価格は直ちに暴落すべく、何人も海外市場において、われわれの商品と競争する者はなく、一旦失つた貨幣は短時日に又復歸するであろう。かくして再び物価は隣国なみに騰貴し、労働及び商品の低廉の利益を失うであろう。これに反し、金銀量が

自由貿易論の先驅者

一夜にして五倍になったとしよう、物価は騰貴し、何人もわが国より購入する者なく、反対に如何なる禁令を以てしても、外国品はわが国に殺到し、貨幣は流出するであらう。(Essays moral, Political, p. p. 185. 186)